

山澤は、大阪出身名門ジュニア瓜破西 SSC、そこは JR の東野、元コンサの竹内も同じ。そこから福島の富岡を選び高校を卒業、法政大に進学する。本田は、京都出身で日バ理事の小国久美理事が所属するピスコムジュニア、小学生の近畿大会でおそらく二人はそこで知り合い何度か対戦しているはず、何故、その後二人は富岡を選んだのか？2011・3の震災で多くの選手が埼玉栄に流れたのに、対しあえて山澤と富岡を選び高校卒業後、本田は関東の大学でなく龍谷大に進学。3年時のインカレ、別々のパートナーだが、本田も山澤もダブルスで敬和学園大学の「声出し王子」小川に敗れ結果を残していない。そして、昨年、4年の時、コロナでインカレ中止。ライバルが実業団1部チームに入部する中、発展途上のコンサを選んだ理由はなぜだろうか？そして、二人はあえて人生の中で、逆行の道を何度も選ぶのか？縁もゆかりもない北海道に来て、「富岡魂」を持つ最後の選手は北海道バドミントン界の歴史を変えるのだろうか？いや、日本バドミントン界の歴史を変えるのだろうか？今後を期待したい。



今回の、国体予選会が無事に終わったのも、手伝っていただいた審判員の方、特にコロナ過ということもあり、リスクを抱えながら平日に休みを取って無理してお手伝いいただきありがとうございました。(3日間連続の方含め)

1年間大会が中止になる中、全道から高校生、成年のトップ選手が集まる年度はじめの大会であり、他の地区が、この大会を参考に今後、コロナ過の大会を開催していく重要な役目の大会でした。

また、ビーストロック杯で審判員を手伝っていただいた方もありがとうございました。派遣審判制を取って、みなさん慣れてきたのでしょうか。大会がスムーズに終了しました。何人かは、公認審判3級を受けても大丈夫な方がいました、ぜひ、チャレンジしてみてください。



一流の真剣勝負の試合を生で見た事のない、苫小牧地区の高校生には、久しぶりの国体予選の地元開催、その反面、異次元のスピードあるプレーに一部ついていけない線審もあり、途中で線審交代や体調が悪くなる高校生が結構いました。線審・補助員として何も訓練されておらず、自分が担当するコートは誰がプレーするのか、わからないまま順番のローテーションをただ続けていた。部の主将や副主将はすぐに線審係に言って経験の浅い部員を守ってあげるべきである。もし、オリンピックの線審が、このようなジャッジをしていたらどうでしょうか？私は、全国レフェリーの経験からこのようなときは、朝のラインジャッジブリーフィング(線審会議)に顔を出して線審たちに「**アクティブに**」と細かく指示します。スコアシートの確認は D レフェリーやアシスタントレフェリーに任せ、自分はコートの巡視に専念し、線審とアイコンタクトを取りながら、士気を高めていきます。時には、「きな臭い匂い」がする試合は、主審と協議してすぐに線審を交代させます。「レフェリーさん、経験のために線審もう少しやったら」とか、「勝手に変えると順番が狂う」と地元の線審係から苦言を言われることはありますが、誤審で傷つってしまう本人やプレーヤーが激高する前に、交代させた方が良いと思います。試合は誰のためにあるのか「それはプレーヤーのためにあるからです。」危険な箇所は事前に**芽を摘む**ことが**レフェリーの仕事**ではないでしょうか？コロナ過の中、試合後、線審・補助員には消毒作業をする手間が増え大変ですが、選手とともに**その大会を作っていく姿勢が審判員として大切ではないだろうか。**

公認審判員会報誌

11 (1) 文責 小藏



## コンサ山澤・本田 JR を止める。

創部 5 年目にして、4 月 18 日コンサドーレは北海道実業団選手権で JR 北海道を、破り初優勝を飾った。

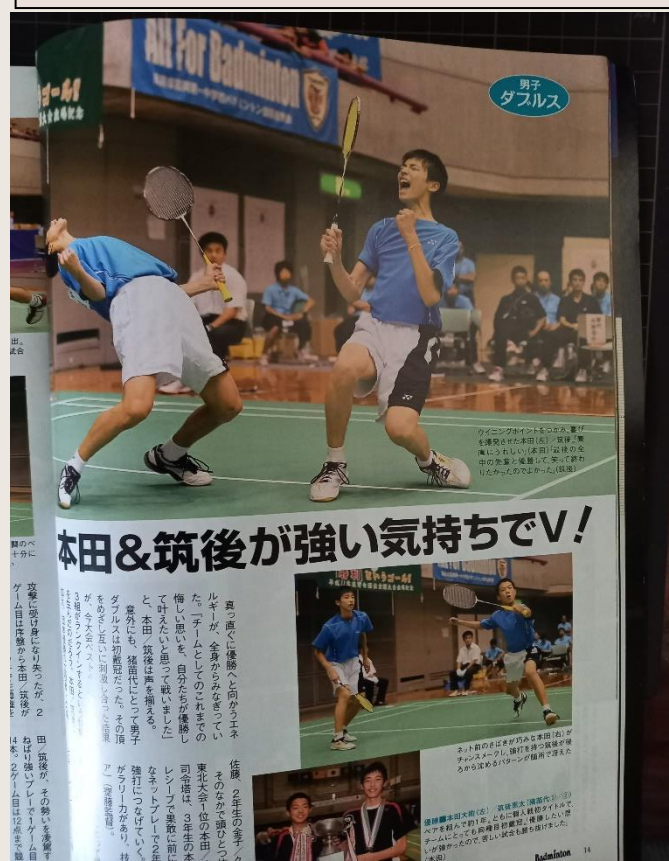
その立役者が、富岡最後の「富岡魂」を持つ選手の山澤・本田だった。

当時のまだ学生の頃の写真、山澤がインターハイシングルスを制し、中学の時、本田は後輩・筑後と組みダブルス王者となった。

岡山インハイでは当時山澤と本田はダブルスを組み 3 位となっている。

4 月 18 日、男子団体決勝のオーダーはコンサが優勝するには、ダブルス二つ取って王手をかけ、JR にプレッシャーをかけなければ、コンサは不利な状況。なぜなら、本来第 1 単に出る予定の渡辺俊和が膝の故障で出られない。シングルスプレイヤーが豊富な JR にコンサは絶対的有利な状況だった。

初戦、JR は渡部大と光島、光島は山澤・本田の高校の先輩で、JR は弱点の二つのダブルスの均一化を図り、渡部・東野組を止め、新たに渡部・光島組としてコンサのエースダブルス大越・三浦組に挑む。序盤はコンサがリードするが、徐々に渡部が前で張り、光島がネット前に逃げたシャトルを潰しに行く戦法でコンサはリズムに乗れず、2-0 で終わる。キャプテンの大越は自分たちが取らなくては自分自身にプレッシャーをかけすぎ本来の力が出せず終わってしまった。続く第 2 ダブルス、JR は東野・武石組とコンサ山澤・本田組の初対決。序盤からコンサの攻撃に防戦一方の JR 組はコンサ山澤の「鬼爆スマッシュ」とダブルスのセットプレイヤーの本田の「キレキレネットプレー」に防戦一方 0-2 でコンサが取る。続く第 1 単は、JR 加藤とコンサ吉原だが、JR 加藤が貫録見せ、JR が先に王手を取る。後がないコンサだった。JR 二番手は元インハイ 3 位の塚本とコンサのサウスポー本田、本田はダブルス専門と思っていたが、その巧みなネットプレーで塚本のミス誘い 2-1 で塚本を撃破、シングルスも巧みさを見せた戦いであり、73 分の熱戦を制し、コンサ優勝に望みをつなぐ。最後、JR はエース渡部大、コンサのルーキー山澤の戦い。1 ゲーム飛ばす山澤の「鬼爆スマッシュ」に対処できない JR は 1 ゲームを落とす。2 ゲーム目は徐々に慣れた渡部は好レーブで反撃。ゲームカウント 1-1 にすると、3 ゲーム目は、また飛ばしだす山澤の「鬼爆スマッシュ」が相手コートに炸裂。



18 ポイントを一気に取った山澤、さすがに息が切れたのか渡部大が徐々に盛り返す。迫る渡部に、巧みなコートコントロールでミス誘い最後 JR を止めた。4 時間 30 分超えの激戦はコンサの初勝利で終わった。かつて、YOJ で主審をしてチェンホンとハフィズ・ハシムの 74 分の死闘と同じぐらい疲れたが、楽しかった 4 時間半でした。